

# 校長室から

校長室だより 第4号  
令和2(2020)年3月10日発行  
文責 宮城県古川工業高等学校  
校長 佐藤 誠



2月27日夕方の安倍首相による全国一斉休校要請を受け、2月28日宮城県教育委員会から全県休校措置の方針が出されたことにより、本校でも、全日制で3月2日(月)から3月23日(月)までを臨時休校とし、年間計画で決めていた修業式は予定通り3月24日(火)に実施することとして、生徒・保護者にお知らせした。定時制は、3月24日までを臨時休校として、翌25日に終業式と離任式を併せて実施することにした。

そのような中、3月1日(日)に、予定通り卒業式を実施した。他校では、在校生の出席をなくす等、様々な対応をされたと聞いているが、本校では当初より、卒業式への参列は卒業生と保護者としており、入退場での吹奏楽部の演奏を割愛した程度の縮小策は行ったが、ほぼ予定した通りに実施できた。その上で、卒業式で卒業生と保護者に述べた「式辞」を、参列していなかった在校生の皆さんにもあらためてお知らせしたいと考え、この「校長室だより」に掲載することにしました。

## 式 辞

例年になく雪の少ない冬もまもなく終わり、いよいよ、実り豊かなここ大崎にも、希望に満ちた春が訪れようとしています。

この佳き日に、本校PTA会長 本郷輝朗様、同窓会長 藤山修一様、ETA会長 望月俊一様をはじめ、御来賓の皆様、そして保護者の皆様の御臨席を賜り、ここに、全日制課程第七十二回、定時制課程第五十七回の卒業式を、このように厳粛に挙行できますことを衷心より厚くお礼申し上げます。

そして、保護者の皆様、本日は、お子様の御卒業、誠におめでとうございます。卒業を迎えたお子様の姿に、感慨もひとしおのことと思います。本校に入学して以来、様々な出来事があったことと思いますが、こまめにお子様を支え、共に歩まれてきたことに、改めて敬意を表しますと共に、これまで本校の教育活動に寄せていただきました、皆様の深い御理解と御支援に対し、厚くお礼申し上げます。

さて、全日制課程二二九名、定時制課程九名の卒業生の皆さん、御卒業、誠におめでとうございます。本日のこの喜びは、生徒の皆さんの努力の結果であることは言うまでもありませんが、皆さんのことをいつも気遣いながら、力強く支えてくださった御家族、そして周囲の皆様の励ましの賜であることを、決して忘れてはいけません。新たな旅立ちを迎えた本日、生徒の皆さんから改めて感謝の気持ちを伝えてもらいたいと思います。

まもなく、三月十一日が来ます。早いもので、東日本大震災から、もう九年が経とうとしています。被災地域におけるインフラ整備は進んできたものの、沿岸地域の根本的な復興は、未だ道半ばという状況です。未曾有の大震災を目の当たりにした私たちにとって、自らの被害の大小や有無に関わらず、一人ひとりが、今自分にできることによって、復興の一端を担うとともに、震災の経験を後世に伝承する責務を果たしていくことが大切だと考えています。

中でも、工業高校の卒業生は、これまでも、そして、これからも、間違いなく地域の産業を支え、復興の原動力としての役割を担っていく立場にあります。卒業生の

皆さんには、本校で学んだ知識や技術・技能を礎に、宮城県内、日本国内、そして、世界の工業界を牽引する技術者として、また、大震災からの復興・発展の一翼を担う技術者として、大いに羽ばたいて欲しいと願っています。

さて、卒業生の皆さんに、一篇の詩を通して話したいと思います。その詩とは、高村光太郎の『道程』です。「みちのり」を意味するこの『道程』は、国語の教科書にも掲載される有名な詩で、授業でも詳しい解説があったかも知れません。

以下、『道程』を読みます。

## 道 程

僕の前に道はない  
僕の後ろに道はできる  
ああ、自然よ  
父よ  
僕を一人立ちにさせた広大な父よ  
僕から目を離さないで守ることをせよ  
常に父の気魄(きはく)を僕に充たせよ  
この遠い道程のため  
この遠い道程のため

この詩は、高村光太郎が、もともと雑誌に発表した百〇二行からなる散文詩を、詩集を発表するに当たり、九行に圧縮・改訂したものです。高村光太郎は、百〇二行の散文詩で、自分が歩んできた曲がりくねった人生を道にたとえ、これからに向けた決意を述べています。九行に圧縮されたこの『道程』には、その決意が凝縮されていると言われています。

皆さんが今まで歩んできた道は、どのようなものでしたか。高校入学前、そしてこの古川工業高校に入学してから今日までの、三年間または四年間、楽しく、誇らしく感じた時もあれば、悲しく、悔しく、落ち込んだ時もあったと思います。その出来事一つ一つが、皆さんを成長させてくれた財産であり、思い出として心に刻むことで、皆さんが次に向かう新しい世界を生き抜くための貴重な経験となるものと思います。

<p>そして、思い返してみてください。よい思い出にも、苦しい思い出にも、必ずそばに誰かがいたのではありませんか。それは、友達かも知れないし、家族かも知れない。いずれにしても、皆さんが過ごしてきた時間は、誰かと共に分かち合った時間だったはずです。今の皆さんがあるのは、決して自分だけの力ではなく、共に過ごした多くの人達からの、たくさんの支えと励ましのお陰なのです。</p> <p>次に、これから待ち受ける道はどのようなものでしょうか。皆さんが向かう社会は、「令和」という新しい時代であり、社会そのものが大きく変化していく転換期になると予測されています。国内では、超高齢化社会の中での労働力不足と外国人労働者を巡る問題をはじめ、介護・年金・教育など、多くの社会問題が顕在化しています。世界では、環境、食糧、エネルギーの問題など、大きな課題が山積しており、かつてないほど人類全体の叡智が必要とされています。</p> <p>また、人工知能・AIに代表される技術革新の急速な進歩が予想される一方、AIには代替できない分野もあると言われています。最終的には、ヒトがAIとどう付き合っていくか、が重要なのだと思います。</p>	<p>これから求められるのは、先を見通す力、自分で判断して、自ら行動する力です。これまで、本校で培ってきた、「生きる力」、「生き抜く力」を土台に、本校の卒業生としての自覚と誇りを持ち、豊かな人間性・創造性を備えた工業人として、また、震災からの復興を支える工業人として、卒業生の皆さんが、今後大いに活躍されることを期待します。</p> <p>皆さん自身が、後続く後輩の道しるべとなるよう、それぞれの道を切り拓いていってください。</p> <p>結びに、卒業する、全日制課程二三九名、定時制課程九名の皆さん一人ひとりが、それぞれの世界に向けて力強く旅立ち、大きく花開くことを祈念して、式辞といたします。</p> <p>令和二年三月一日 宮城県古川工業高等学校長 佐藤 誠</p>
--	---

この後、新型コロナウイルスの感染が収束し、通常の学校生活が再開できるのがいつになるのか未だ不透明であるが、学校内に生徒の声がない時間がこうも長く続くと、わびしさが募ってくる。できるだけ早く学校生活が再開できることを、ただただ祈るのみである。

在校生の皆さんには、活動場所や内容に制限があることは承知しているが、逆にこの機会とできた時間を大いに活用して、普段の生活ではなかなかやれなかったことにチャレンジして、自分自身のスキルアップにつなげて欲しい。学校から出された課題だけでなく、映画でも読書でも、自分の興味関心を広げる時間をぜひ作って欲しい。自分にスイッチを入れて、取り組んでみてください。